

女子大國文

第百五十七号

平成二十七年九月発行

女子大國文 第百五十七号

平成二十七年九月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百五十七号

平成二十七年九月十五日 印刷
平成二十七年九月三十日 発行

〒605-8505 京都市東山区今熊野北日吉町三番地
編輯兼 発行者 京都女子大学国文学会

電話 〇五七五二一九〇七六
FAX 〇五七五二一九一二〇
振替 〇〇〇〇一五二一三四

〒605-8504 京都市上京区上長者町通黒門東入
印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇五七四一四一〇八代
FAX 〇五七四三二六二八二

〔資料紹介〕

京都女子大学図書館所蔵『神野寺縁起絵巻』……………中前正志(一)

—— 襲速日命遷座伝承の縁起絵巻化 ——

〔資料紹介〕阪正臣研究—資料留—……………八木意知男(三四)

坂東本『顕浄土真実教行證文類』所載

濁声点三種について(二)……………西崎亨(九二)

〔新聞—美先生退職記念小特集〕

〔最終講義録〕平安朝文学の「白」の世界……………(九七)

年譜・著述目録等……………(二三)

彙報……………(二三)

京都女子大学国文学会

彙報

○女子大國文第百五十七号をお届けします。今号は平成二十七年三月末の新聞一美教授の定年退職を受け、先生のご業績と本学に於けるご功績を讃えた小特集を組みました。女子大國文としては近年そのためしがなく、編集委員の不慣れ・不手際のため、新聞先生ならびに関係各位に対してはご迷惑もあつたと存じますが、ご海容のほどをお願い申し上げます。

研究室たより

○先に触れましたように、本年三月末をもって、新聞一美先生が定年退職なされました。新聞先生は平成十七年に、前任校の甲南大学より本学文学部国文学科へご着任になられてより十年間、国文学科の教育・運営に多大なご尽力をなされましたことは周知のとおりです。また文学部長としても繁多で重要な業務をこなされ、大学全体の運営にも大きな貢献をなされました。そのような先生の「退職は、まことに残念ではありますが、先生のますますのご健勝・ご活躍を祈念いたしますとともに、今後学外から京都女子大学国文学科をお見守りくださいま

すよう、重ねてお願い申し上げます次第です。本号には、関係する各位から新聞先生の思い出の記をご寄稿いただきました。

○四月より、漢文学領域の後任として、滝川幸司教授を奈良大学よりお迎えしました。日本の漢文学、菅原道真などの漢詩人を中心に研究されていますが、和歌文学や物語文学と漢文学の関係など、平安文学全般をオールマイティーにこなされている多才な先生です。滝川先生には、就任のご挨拶をご寄稿いただきました。

○本年度は、普賢保之教授が国内研究員として龍谷大学へ出向いておられます。

○本年度の文学部国文学科主任、および国文学会代表幹事は山崎ゆみ先生です。江富範子先生、宮崎三世先生とともに、国文学科・国文学会の運営にあたっておられます。

○本年度の学科委員長は、大国三回生の安本智美さん、副委員長は同じく大国三回生の道古幸奈さんです。各クラスの学会委員長とともに、国文学会の運営にあたってきています。

【受賞】

滝川先生が第四回池田亀鑑賞を受賞されました。この賞は、日本古典研究、とりわけ『源氏物語』研究に大きな足跡を遺した池

田亀鑑氏を讃え、かつ「伝統ある日本文学の継承・発展と文化の向上に資することを目的」として、生誕の地である鳥取県日野郡日南町および池田亀鑑文学碑を守る会によって創設されました。趣意は「文学の研究基盤を形成する上で、顕著な功績のあった研究に対して贈る」というものであり、今回滝川先生の御著書『菅原道真論』(塙書房)がその栄誉を博しました。本学にご着任早々の受賞であり、国文学科にとっても大変、喜ばしい知らせとなりました。

滝川先生、おめでとうございました。なお、授賞式と受賞記念講演は、去る平成二十七年六月二十七日(土)に、日南町総合文化センターにて行われましたことを附記いたします。

二〇一五年度国文学会行事(前期)

○新人生オリエンテーション

四月四日(日) 午後一時三十分より 於J24教室

○優秀論文発表会

五月九日(土) 午後一時より 於J420教室

〈卒業論文〉

明石巻と「波の声」―唐めきたる須磨・明石―

渥美 歩美氏

近世文学と風俗―『女殺油地獄』と

「女の家」伝承を中心に― 白谷絵理子氏

梶井基次郎「雪後」論―挿話を中心に―

下田早希子氏

『分類語彙表』による意味分類から見る

近世女性語の特徴について 大槻 法子氏

〈修士論文〉

菅原道真の漢詩文に見られる『莊子』の受容

―「優遊」と「涯岸」をめぐる― 李 現氏

○春季公開講座(大学と共催)

五月二十二日(金) 午後二時四十五分より 於J420教室

講題 王朝物語に見る女性像

——「かぐや姫」の系譜を辿って——

講師 九州大学大学院教授 辛島正雄先生からしまさお

○新人生歓迎行事 能楽鑑賞会

五月二十三日（土）午後一時より

於音楽棟2階演奏ホール

着付・囃子・狂言に関する解説を聴講、小鼓・大鼓体験。

続いて、狂言『寝音曲』、能『橋弁慶』を鑑賞。

○国文学会旅行は、後期に一度実施することに、学会委員会で決定されました。

【滝川先生就任の辞】

源氏物語から菅原道真へ

滝川 幸司

平安時代の漢詩文や和歌を研究しています。現在は、菅原道真とその周辺の漢詩人、儒者が中心です。この研究テーマに至るまで様々な曲折がありました。

出身は、長崎でも海のない町で、大学進学者も希な田舎です。大学へ行くことは考えてなかったのですが、高校一年生の時にたまたま手に取った田辺聖子『新源氏物語』があまりにおもしろく、源氏物語の原文も読み、古典文学を自由に正確に読みたいと思いついて、関西の大学がいろいろということで、大阪大学を受験、入学しました。当時阪大は二年間教養部で学ぶことになっており、島津忠夫先生の国文学講読を受講しました。先生の講読は古今和歌集でしたが、テキストは、古今和歌集両度聞書という、まったく未知の古注釈書でした。この他にも、古注を用いながら古今集を講読していったのですが、すべてが新しい経験でした。物語を始め古典文学を理解するのに和歌の知識は必要だと考えてはいました。多くの人々が、長く注釈を加えていった古今集自体に強く興味を持つようになりました。学部での指導教官は伊井春樹先生で、

源氏物語がご専門ですが、古注釈、古筆切など幅広いテーマで研究されていました。源氏物語を研究したいと思っていた私にとつてはうってつけだったわけですが、結局、講読以来の興味を引きずったまま、古今集に焦点を絞ります。その頃、古今集を始めとした仮名文学に漢文学の影響が続々と指摘されていました。阪大には、教養部所属でしたが、平安朝漢文学がご専門の後藤昭雄先生がおられ、先生の演習を受講した私は、卒業論文を、古今集と漢文学というテーマに設定しました。

大学院進学後は、古今集が勅撰集であることの意義・意味について考え始めました。平安時代、いわゆる文学としてもっとも格式が高かったのは漢詩文です。中国に範を取った律令社会なので、すから当然です。そうした社会で、どのようにして和歌の勅撰が成り立ったのか。しかし、そもそも漢詩文が公的にはもつとも格式が高い、といっても、具体的にどのような地位を占めているのか、それがどのような内実を持つのか、ということを明らかにしないと、古今集、延いては勅撰和歌集の位置づけも明確にできません。そう考えて、古今集成立と同時代のまとまった漢文学資料である菅原道真の菅家文章・菅家後集を本格的に読み始めたのが、博士後期課程に進学した頃でした。ところが、菅家文章には、宮廷詩宴（天皇が主催して開く詩宴）での作が多いことに気づきま

す。天皇の命令による作品なので、個人的な志が詠まれておらず、天皇賛美が中心です。そのためか研究者からは評価されないのですが、菅家文章は道真の自選で、それらの作を自分で載せているわけです。何故なのか。宮廷詩宴自体を検討せざるを得なくなりました。結果的にこの作業を通じて、国家が要求する文学を考察することになり、古今集の勅撰、和歌の社会的地位への視点を獲得することができました。そうして道真に戻りますが、道真の作品を読んでいくと、宮廷詩宴で詩（応制詩）を作ることに強い矜持を持っていることに気づかされます。現在の研究者が否定しているところに、道真の強い意志があったのではないか、という視点で、最初の道真論を執筆しました。こうして一九九八年三月に博士論文を提出し、前任校の奈良大学に赴任しました。

以後、道真を中心に研究を進めることになるのですが、いくら道真が強い自覚を持っていたといっても、すべてが宮廷詩宴関係、公的な作品ではありません。私的な詩文もあります。また、道真と交流を持つ人物には、現在まったく注目されていない人々がいまます。彼らの多くは、道真と同じように大学寮紀伝道で中国の歴史・文学を学んだ官僚です。ところが、身分も低く作品がほとんど残っていないため、研究対象にされることはありません。しかし、道真と密接に関わる彼らを知らずに道真のことを理解するこ

とはできない、と考へ、彼らの伝記研究を開始します。伝記である以上、関係資料はすべて検討しなければなりません。そしてそれらは、歴史資料がほとんどです。大学院時代に宮廷詩宴を検討している際にも歴史資料を扱い、指導教官から「君は文学をやっているんだからね」とたしなめられたこともありました。しかし、そうした資料の中から見える彼らの存在は、当時の文学、学問を考へる上で有効であると考えられています。彼らの立場、社会的地位、学問の方向性を理解しない限り、作品の正確な理解はできないと思うからです。

源氏物語を研究したいと思っていた私は、菅原道真を始めとした漢文学研究に行き着いたわけです。その時々偶然、成り行きに左右されていますが、歴史資料や漢文学資料をそれなりに読んで来たことで、見えてきたことも多くあります。源氏物語などの作り物語とて、当時の社会の産物で、歴史と切り離すことはできないのですから。また、こうした研究を通じて自分の性癖もわかってきました。虚構の物語について考へるよりも、実在の漢詩人や歌人が、どのような場でどのような作品を作ったのか、どのような存在として、当時の社会に生きていたのか、という、生身の方に興味を抱く傾向があるようです。

この四月から本学に着任しました。京都という、それこそ生身

の道真たちが過ごした場で、新たな研究を展開させたいと思っています。今後も研究テーマは様々に変転していくでしょうが、京都という土地を活かした研究にしたいと考えています。

優秀論文発表会聴聞記（五月九日）

心持のちがひ

大國四回生 井上 真理子

今年もまた、この時期がやってきました。年度のはじめにある優秀論文発表会。毎年、先輩方の発表をお聴きすることを楽しみにしていたのですが、今年は少し、いや大分、心持が違っていたように思います。今年は四回生ということもあり、前年度よりも身近に感じながらお聴きしていました。どの先輩方の発表も、それぞれに惹きつけられるものがあり、分野・テーマが違えば、調査・研究方法も変わっていくことに、当たり前前のことですが、今更ながら気づかされました。

私自身、どこに目をつけるかを考へることが大事だということ、自分で閃かないと意味がないということは理解しています。しかし、ピンと来ないこともあるかもしれません。たとえ、ピンと来たとしても、その研究が最後まで行き着くとは限りません。先行

研究で同じことをしている方がいらっしやったら、自分で研究できなくなり、またひらめくことが必要になってきます。そこで途中で作品やテーマを変えることになる、もしかしたら、調査方法を変えなくてはいけなくなるかもしれません。それはとても大変なことだと思います。一つのことを追い求めていくことの中には、そういったリスクもあるのだと、今、改めて考えたのです。そういうことを考えると、調査・研究を進めていくことが、いかに難しいかが頭を過ぎり、まだ、始めの段階なのに、めげそうになります。しかし、そういうリスクが伴う中で、先輩方は、御自分の調査・研究をなさってこられました。先述したような、私が各発表で惹きつけられる感覚に出会ったのは、そこを潜り抜けてこられたという事実が発表の中から感じられたから、かもしれせん。

『源氏物語』の渥美先輩、『女殺油地獄』の白谷先輩、『雪後』の下田先輩、『計量国語学』の大槻先輩、『菅原道真の漢詩文』の李現先輩。先輩方は、「こつこつやっていくこと」「分らないことはそのままにしないこと」「早目に取り組むこと」「好きなことを研究すること」等を、大事なこととして挙げられていました。正直、耳が痛いものもありました。どれもが当たり前のことのように思えますが、やれるはずのこれらのことを自分でやっていく

ことが、卒業論文作成において、難しいことの一つだと思えます。（あくまで一般論ですが）人間、どうしても居心地のいい方・楽な方を選んでしまいますし、自分自身も、そうだな……と思うことがたくさんあります。なんとかそこから抜け出して、必死に調査・研究をして、卒業論文が出来上がった時、何を感じられるのか……。その何かを感じられるのが、最後まで走り切った人だけだと考えると、がんばれるような気がしません。

これら全てを含めて、一生に一度しかない卒業論文作成、一つのことを調査・研究し、追求していくことを楽しみ、それに一生懸命に取り掛かれたらいいと思った一日でした。発表会にいらして下さいだった先輩方、改めまして有難うございました。

【春季公開講座聴講記】（五月二十二日）

公開講座について

大國三回生 岡 畑 有 希

講座タイトルにある「かぐや姫」に惹かれたのか、例年よりも受講者数が多いような気がしました。かぐや姫は、老若男女問わず、さまざまな年代の人々に親しまれています。その一方で、神

秘的な姫の描写と不思議な話は、多くの謎を含んでいます。

今回の、王朝物語の女性像は、かぐや姫の系譜を辿っている、という考察はその謎を解き明かす一つのピースなのかもしれないですね。

かぐや姫の登場する竹取物語には、いくつかの重要な見どころが存在します。それらについて考察すると、女性が主要登場人物である王朝物語にも類似した展開があることが分かります。今回はその内容について詳しく説明を下さいました。

説明される時に、軽く触れられた日記に『更級日記』がありました。更級日記は、主人公の菅原孝標女が、自らの人生について書いた日記です。とても有名な作品で、高校時代には教科書や参考書に、例文としてよく登場していたので知っている人も多いと思います。特に、少女時代、菅原孝標女は、物語に深い執着を示していました。そんな主人公の性質は、自身と重ね合わせているところもあって、印象深く残っています。

日記という、現実的な要素をはらんだ作品と、竹取物語のような幻想的な作品は、同じ文学作品といっても、あまり似ている点がないように感じていました。しかし、今回、このような講義を受けて、菅原孝標女にもかぐや姫の要素を受け継いでいる部分があるのかもしれないと思いました。

菅原孝標女は、物語に大きな憧れを抱いていました。もっと言えば、物語のような展開が自分の人生に起こればいいと思っていました。しかし、実際はそのようにはなりませんでした。自分自身も、物語に登場するような特別な人物のようになれないままで、願った通りにならない自分の人生を見つめ、日記を記すことになりました。

対して、かぐや姫は出自からして不思議な人物です。結婚できる年齢には、その美しさが帝の耳に入るまでの、立派な人物になりました。しかし、かぐや姫は周囲の望んだような身の振り方せず、もともといた月の世界へ、使者とともに帰ってしまいます。一見すると、貴族としては平凡な菅原孝標女と、特別な出自と優れた容貌を持つかぐや姫は全く、似ていないように思われますが、二人が自身存在する世のに対して、抱いていた感情が似ているように思いました。菅原孝標女は、物語のような特別な出来事がちっとも起こらない、加えて満足のいかない生活を強いられる人生に大きな不満や不安を抱えていました。そして、かぐや姫も、月へと帰らなければいけない自分の境遇や、上手く立ち回れない世の中に対して、大きな不満や不安を抱いていたことでしょう。

このように菅原孝標女も、かぐや姫と似通った点を持った女性

であり、文学作品としての性質が異なっている、影響を受けていたと考えることができます。これからは、主要登場人物に女性がいる場合、かぐや姫の系譜がどのように受け継がれているのか考えてみたいと思います。

公開講座「王朝物語に見る女性像

—「かぐや姫」の系譜を辿って—に参加して

大國三回生 安本智美

今回の公開講座では、「かぐや姫」の系譜を辿りながら、『竹取物語』の魅力、展開について、辛島正雄先生にご講演いただきました。王朝物語の女性像の原点は「かぐや姫」であるところ指摘され、さまざまな王朝物語について説明してくださいました。王朝物語において、男主人公は自由に動き回ることができるということに対して、女主人公は親族以外の男性に顔を見られないように屋敷の奥で生活しているため、社会の様子を知ることができず、日常生活の活動範囲も狭いものとなっています。したがって、女主人公に世界を広げる窓の役割を与える男性（夫・恋人）の登場人物が必須なのだそうです。確かに、古くから女性は男性に従うことが求められ、女性の行動範囲はごく限られた空間しかありませんでした。だからこそ自由に行動できる男性の登場人物は女主

人公の眼として非常に重要であり、これが王朝物語に恋物語が多い理由なのだと思得しました。

『竹取物語』において、五人の求婚者が登場し、かぐや姫の出す難題をクリアすることができず退散するというエピソードは多くの方々ご存じのことと思います。これは説話の「求婚譚」という話型の一つですが、大抵の「求婚譚」では最後に女性が結婚することに對し、かぐや姫は誰とも結婚しなかったということが変則的であるそうです。現代とは異なり、女性は結婚して夫を持つというのがほとんど当たり前であった平安時代において、かぐや姫は特殊な存在でした。かぐや姫は自身がいずれ地上を去らなければならぬと分かっていたからこそ、頑なに結婚を拒否したのではないかと考えられます。ここには、かぐや姫の「非人間性」が見え隠れしているのではないかと思います。

かぐや姫は羽衣を身に纏い月へと帰ります。この場面は高校の国語科の教科書に取り上げられることが多いことから、月を見るとかぐや姫のことを思い出す方もいらっしゃるかと存じます。この場面には、「羽衣伝承」が深く関係しています。「羽衣伝承」は、古くは『帝王編年記』七三年条に記載されているそうです。空から降りてきた天女に一目惚れした男は、天女が天へ帰るための羽衣を隠してしまいます。天女と男は夫婦になり、子を儲けます

生きた芸術を感じて

大國 一回生 福田 有希奈

が、天女は男が隠した羽衣を探し出し、羽衣を身にまとって天に昇っていきます。多くの「羽衣伝承」では天女と男が結婚することに対し、『竹取物語』のかぐや姫は天に昇る最後まで結婚することを拒否していたというのが他の「羽衣伝承」の話とは異なる点です。また、かぐや姫が月へ帰った八月十五夜はその後の王朝物語の主人公にとって特別な日として演出されます。『源氏物語』において紫の上が亡くなったのは八月十五日ですし、『今とりかへばや』において男装をした女中納言がわが身の宿縁の拙さを嘆く場面は九月十五日、中秋の名月の時期でした。月の夜がかぐや姫を連想させるというのは、今も昔も変わらぬことのようにです。

『竹取物語』は様々な文学作品に影響を与えました。『源氏物語』にも「物語の出で来はじめの親なる『竹取の翁』とあるように、『竹取物語』は古くから親しまれ、読まれてきました。かぐや姫は多くの男性の求愛を拒み、誰とも結婚することなく月へ帰ってしまいました。地上に残された人々の悲しみは計り知れないものだったことでしょう。その郷愁の想いは、月を見上げる私たち現代人の心にも受け継がれているのではないのでしょうか。

能楽を生まれて初めて見る私が演目の中で楽しみにしていたのはやはり、特別に装束を付けて演じてくださった「橋弁慶」だ。味方團さんが弁慶に扮して演じることだった。着付けの披露を实演しつつトークで盛り上げてくださった味方さんは細身に見えたので、弁慶という大男に扮することができのだろうかと開演直前に思ったのだが、弁慶が登場した瞬間、そんな杞憂はどこかへ行ってしまった。きらびやかで迫力満点の、見事な大男が舞っていたのである。

着付けの過程を見せてくださるというのは珍しいことだと聞いていたので、着付けのコーナーでは思わず前のめりになりそうだった。普段は見ることでできない、豪華絢爛な装束の向こう側を覗き見しているような気分になった。印象的だったのは、能面を被るため紐で頭部をきつく固定するという話である。汗をかくと、こめかみまで締まることがあるという紐の絞め加減は、着付けている人が着付けられている役者に向かつてちいさく尋ね、確認する。役者が「大丈夫」という判断を示した瞬間、絞め加減に

おける責任は役者本人に転じられ、舞台の上で何があるかと、全て自己責任として背負うことを意味するという。最悪の場合死に至ることもあったらしい。事前に受けた能楽についての授業で、舞台の奥で控えている、「後見」の役割には、役者に何かあったときの対応も含まれていると習ったのを思い出した。美しく舞うことは命がけである。装束を付け終えるまで役者がスリッパを履いているという話も、紐の絞め加減の話に似ていると思った。舞台に降り立ち舞う前に、からだを役として完成させ、じつと精神を集中させるのだろうか。舞台上がることへの覚悟を習慣的にまとい続けている、能楽師の気迫のようなものを感じた。

一枚の着物でも、着方によってたくさんの演出ができるそうだが、装束というだけで言えば、初めに述べた弁慶の装束は、役者が持つ以上の迫力を演技に添えている例としてすでに目撃している。それだけでなく着付けの工夫をすることで、同じ着物でも役者の体格にあわせたサイズの調節ができるらしい。着付ける人の顔の大きさを感覚的に計算し、結ったカツラの横髪のラインを能面に描かれた前髪のラインにピッタリ合わせるといふ技術も披露してくださった。自然にやってのけていらしたが、そのような着物を着付ける手際や、結びあげる手さばきなどがまるで魔法のようで、私は思わずため息をついていた。

公演を彩る楽器、小鼓と大鼓は動物の皮でできており、乾燥させた皮で作られている大鼓の方が、見た目の大きさからは意外な高音を奏でる。素朴な材料を、乾燥や湿り気などを利用して多彩に変化させるなど素材に逆らわない伝統的な手法が受け継がれているのだなと思った。楽器は乾燥を好むものや湿度を好むものなどがあり、保管方法が異なるそうで、「生きているみたいだな」とおもしろくなった。古くから積み上げられ、洗練された知恵や素朴さの中に、しなやかな強みを感じたし、「生き物」としての能楽を垣間見たようだった。

今回はじめて能楽を鑑賞したが、思った以上に感動した。短時間ながら、観客と役者の生きたコミュニケーションや命がけの舞、楽器や装束に隠れる繊細な伝統の重みを感じる事ができた。台詞の古風な言い回しは勉強不足でよく分からない部分も多かったが、国文学科を志したからには「能楽」という生きた芸術の魅力を理解できるようにになりたい。そしてそれを発信できるようになればもっと素敵だと思ふ。また機会があれば、もっと能楽にアプローチしていけるよう、勉強を進めていきたい。

二〇一四年度(平成二十六年) 論文題目

修士論文

落葉の宮との結婚に見る夕霧像

—光源氏・柏木との比較を通して—

小巻 美穂

『更級日記』の構成—対称性を中心に—

もう一人の業平

八野 楓子
小杉 祐佳

総持寺縁起の変遷—大神御井の人物像を中心に—

新井 涼子

菅原道真の漢詩文に見られる『莊子』の受容

李 現

—「優遊」と「涯岸」をめぐる—

中 世

『今昔物語集』における「野猪」の語義

平安時代以前の兔本生譚の受容

—『今昔物語集』を通して—

井上 慧子
金田 亜津美

卒業論文

中 古

兼好の遁世の理由—隠者という選択—

平安美人の誕生—文学作品から見る背景—

善天狗の成立—『沙石集』に至る過程を中心に—

道成寺説話における「血涙」

—紀伊国の女の涙に込められたもの—

木口 草子

高島 笑菜

久田 麻未

飛鷹 淳貴

廣 實 英理香

御伽草子『浦島太郎』の諸本の分類

—「四方四季の庭」における語句の連想から—

「卒都婆小町」における小野小町像の考察

『今昔物語集』における和歌説話の扱い

—『俊頼髓脳』と比較して—

廣 實 英理香

峠 岡 洸香

八張 菜摘

明石巻と「波の声」—唐めきたる須磨・明石—
螢巻の「夕闇」考
—『玉の小櫛』にはじまる注釈批判から—

渥美 歩美
青雲 遥香

『源氏物語』夕顔巻における怪異的要素

—「葛城の神」をめぐる—

上田 由貴子

和歌にみる紫の上の変貌—内親王降嫁の波紋—

葵上葬送における光源氏の服喪表現

鎌田 小裕香
川原 珠希

八張 菜摘

近 世

小町歌の拘束力―『花の色は』の歌について―

青木 智 鈴

恋歌における「命」

一之瀬 愛 美

西行「なげけとて」歌について

木 村 理

―平懐体をめぐって―

『岩倉の狂女恋せよほととぎす』考

小 西 沙 季

近世における金魚の文化誌

樋 口 奈 々

『水無瀬御影堂奉納五十首和歌』の歌題について

古 家 友 希 穂

歌題「被忘恋」について

細 溝 美 佑 希

西行「たはふれ歌」について

三 木 藍 子

『床の塵』についての考察

吉 田 麻 里 子

『心中天の網島』における「異見場」の効果について

池 田 瑞 希

―叔母の「異見場」を中心に―

伊 藤 陽 菜

『雨月物語』考

伊 藤 瑞 希

―「吉備津の釜」における磯良の人物像について―

伊 藤 瑞 希

江戸時代の赤本の工夫について

伊 藤 瑞 希

―赤本『枯木花さかせ親仁』を中心に―

内 田 真 美

『東海道四谷怪談』における蛇の怪異について

内 田 真 美

―小仏小平の指先の蛇とお岩の関係―

『好色一代女』の主人公の人物像と西鶴の意図
『心中天の網島』考
大久保 咲つ妃
門 野 綾 乃

―『心中重井筒』との比較を通して―

良寛の「手まり」長歌の独自性
河 中 志 穂

―万葉集、近世「手まり」歌との比較を通して―

近松心中物最期場についての考察
熊 野 ひ と み

―男の「罪」と女の受苦の描写―

『心中天の網島』における人間関係と誓紙の関わりについて

―治兵衛と玉左衛門との関係を中心に―
国 分 千 花 子

『けいせい反魂香』考

近 藤 志 保

―元信をめぐる恋愛劇について―

黄表紙『化物大江山』論―食物の擬人化の意義―
重 森 早 百 合

近松世話浄瑠璃における「阿呆」がもたらす

「笑い」の効果について
菅 又 彩 花

『夕霧阿波鳴渡』考―夕霧の人物像を中心に―

高 岩 加 奈

『心中天の網島』『五左衛門の人物像』『心中宵庚申』『心中重井筒』

『山崎与次兵衛寿の門松』との比較を通して―
大 代 茉 鈴

『化物よめ入り』考―化物ならではの面白さ―
出 口 瞳

近松の浄瑠璃におけるあほう役の存在意義
中 町 瑠 那

―歌舞伎と浄瑠璃の比較を通して―

『心中天の網島』考

那須 美沙紀

— 治兵衛と兄の孫右衛門について —

— アルファベットの使い方と一人称の作品について —

大本 実咲

『雨月物語』巻之二「菊花の約」における左門と宗右衛門の

樋口一葉「ゆく雲」題名考

北 三紗都

人物像について—原話との比較を通して—

野間口 絢

— 貴船伯爵夫人の藤色の衣について —

『二人比丘尼』における女性像について

福嶋 唯華

泉鏡花「黒猫」を中心とした怪奇小説表現の研究

— 正三の思想書との比較を通して —

藤羽 唯

泉鏡花「外科室」論—語り手が画師であるのは—

近松作品における妻と「女同士」の義理

前田 希

梶井基次郎「雪後」論—挿話を中心に—

— 妻の果たす役割 —

前田 希

吉屋信子の少女小説研究

近松世話物における演出の効果

前田 希

— 「三つの花」からみる少女の成長 —

滝沢 綾

— 「隠す」「隠れる」「立ち聞き」の表現について —

南浦 孝子

三島と「憂国」の関係性の変化

『好色五人女』考—八百屋お七の人物像について—

山本 尚味

永井荷風「すみだ川」論

『女殺油地獄』における与兵衛の懺悔

山本 尚味

— 永井荷風「すみだ川」における懐旧の思いについて —

中山 尚子

— 与兵衛の人物解釈を中心に —

山本 麻友

「山月記」論—なぜ「虎」に変身したのか—

『心中重井筒』考—妻お辰の心情を中心に—

平岩 聖羅

川端康成の自然描写—小説「古都」を中心に—

— 翻案における了意の工夫 —

平岩 聖羅

「金色夜叉」流行の要因

近代

樋口一葉「十三夜」論—お関の人物造形について—

伴 藤理 瑛

宮沢賢治のユートピア

三好 麻代

太宰治「魚服記」論

藤川 綾美

星新一のショートショートの方法

朝田 萌

「手袋を買ひに」論

藤崎 安里佳

泉鏡花「化鳥」論

宮林 里佳

—「羽の生えたらうつくしいねえさん」について—

樋口一葉「軒もる月」論—高笑いする女—

川端康成「弓浦市」について

—「父となる話」、「天授の子」との比較—

夢野久作『一足お先に』作品論

—先行研究への反論—

「愛と美について」と「ろまん燈籠」における

連作の順序の必然性

未明童話における母親像について

太宰治「貨幣」論

—欲望を克服し得るものとしての「母性」—

中島敦の幼さを、「文字禍」から読み解く

—ナブ・アヘ・エリバと中島敦の共通点—

よしもとばなな作品における「光」について

—多用される「光」の役割とは—

『きもの』にみる幸田文の自己投影

江戸川乱歩『蟲』考

—主人公の異常性による破綻について—

「おさん」と「皮膚と心」における

「ヒト」表記の使い分けについて

廣介童話の死作品について—初期作品を中心に—

「Kの昇天—或はKの溺死」

—「泥濘」との相違点から読む—

「バベルの塔の狸」論

—主人公（ぼく）は詩人を辞めて何になったか—

梶井基次郎「路上」の評価

—後作品から見えてくる価値を探る—

「素戔鳴尊」「老いたる素戔鳴尊」における

主人公スサノオに使われる（神）の表現

三浦綾子「氷点」における空間描写

—北海道見本林を中心に—

中原中也の人称問題—作者と一人称（僕）—

「空乏男」論

黒い男による効果

—森茉莉の初期小説をめぐって—

国語学

仮名読新聞に見られる談話体

—東京日々新聞との比較を通して—

戦前と戦後の国語教科書比較

辻 絢香

豊山 瑞希

中村 桃

中村 有里

難波 舞子

東出 明子

峯重 咲希

宮坂 里穂

山崎 堇

伊藤 百花

乾 恵理子

—言語教材を中心として—

仮名読新聞におけるふり漢字

—市井の人々への配慮から—

『ヨウダ』を用いた直喩表現の考察

—夏目漱石の前期三部作を使用して—

『分類語彙表』による意味分類から見る

近世女性語の特徴について

漢語オノマトペとルビに関する考察

—明治前期の翻訳小説—

外来語以外のカタカナ表記語

—年代別に見た傾向の違い—

南山城村・笠置町・旧島ヶ原村の方言の比較

太宰治の小説に見る女性語

—会話文の語尾に着目して—

日本語における親の呼称

「親に人称代名詞「あなた」を使用することは可能か」

手稿本『和英語林集成』の研究

—初版本との見出し語の比較から見た—

書籍版ケータイ小説はケータイ小説といえるか

『増補布令字弁』の掲出語

—『布令字弁初編』と比較して—

樋口一葉の振り仮名について

少女マンガにおける『女ことば』の使用について

『世間胸算用』の用字

—振り仮名付き熟字を中心に—

「歌詞の表現特性」

—Greeneの歌詞を中心として—

明治初期翻訳小説における振り仮名の比較

—『小説八十日間世界一周』を資料として—

副詞「やはり」の意味変化

—発生から近代まで—

中野重治小説に出ている福井方言

八代集の「恋」—「恋」の対象がどう変化したか—

場面によって変わる意味

—「ぞっとしない」の場合—

「〴〵的には」という用法について

—読売新聞スポーツ面のインタビュー記事の調査結果より—

中井和子著「京ことば訳源氏物語」の京ことば

—「桐壺」「帚木」について—

オノマトペ「しとしと」の語誌

上久保 まり子

植田 綾

大槻 法子

大寄 汐

岡室 千鶴

久保 綾香

河野 由梨

児玉 かおる

佐藤 裕美

島 徳子

島 田りか

高橋 ちさと

田口 琴美

竹内 友美

武田 滯奈

田淵 恵

堤 智世

坪田 志穂

中井 結

中西 智星

西本 早希

原口 小姫

麓 百恵

日本人の知らない類義語・類義表現

大塚 千佳

—京都女子大学生へのアンケートから—

和泉方言における間投・文末・打消・接続の表現について

—岸和田の高校生へのアンケート調査から—

兵庫県播磨方言について

—若い世代における使用状況と方言意識—

若年層と敬語

—京都女子大学生へのアンケートから—

日本語の乱れについて

—京都女子大学生へのアンケート調査をもとに—

若者語—「マジ」「ガチ」「リアル」の比較調査—

女性言葉の変遷について

—明治、大正時代と現代の比較を交えて—

広島県安芸方言について

—若年層へのあんげ—をもとに—

曖昧な日本語の理解調査

—「大丈夫」「全然」「結構」「やばい」をもとに—

児童文学からみるオノマトペ

—当て字について—高校生に対するアンケート調査—

「女性語」の使用頻度調査

—フィクションの世界から—

—京都女子大学生へのアンケートをもとに—

広島県備後地方方言について

—高校生へのアンケートを基に—

創作物における関西方言の使用について

—「役割語」として機能する関西方言—

津市方言の研究—中学生へのアンケートをもとに—

山本 華奈江

民俗学

年中行事と民俗神—亥の子行事を中心に—

お百度詣りと庶民信仰—大阪の事例を中心に—

近世願掛け習俗の研究—江戸・大坂を中心に—

近世文学と民俗

—『女殺油地獄』と「女の家」伝承を中心に—

口承文芸と民俗信仰

—奈良絵本『瓜姫物語』を素材として—

—中世文学の鬼と女性—謡曲『鉄輪』を題材として—

『三輪大明神縁起』と修験道

長野 美奈子

西中 愛

三宅 愛未

伊藤 由紀

音山 菜摘

音山 菜摘

白谷 理絵子

菱崎 結

松尾 彩乃

森田 美夏

『女子大國文』 投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。

② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

六、(投稿先)

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務

局まで連絡すること。

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ、或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

大谷俊太・坂本信道・田上稔・滝川幸司・豊島修

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読の結果を報告、審議の結果、三点が掲載となりました。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(坂本・滝川)